

令和4年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(総合型選抜)

課題論文

(地域学部 地域学科 国際地域文化コース)

(注意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は3ページ、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚である。
指示があってから確認すること。
3. 解答は解答用紙(縦書き)に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

次の資料は、平野啓一郎『生命力』の行方―変わりゆく世界と分人主義』に所収されているエッセイ（「生き辛さの原因は？」、「私とは何か―「個人」から「分人」へ」）である。これを読んで、次の問いに答えなさい。

問一 著者の主張を二〇〇字以内で要約しなさい。

問二 「分人」という概念の長所・短所を指摘した上で、「自己の多様性」に対するあなたの考えを具体例を挙げながら八〇〇字以内で述べなさい。

「分人」とは、何なのか？

一言で言うなら、人間を見る際の「個人」よりも更に小さな単位である。

私たちは、日常生活の中で、当たり前のように多種多様な自分を生きている。勿論、妄想的に、勝手に分裂するのではない。常に、相手次第、場所次第である。

職場の上司といる時と、気の置けない友達といる時とは、決して同じ人間ではない。当たり前前の話だ。しかし、環境によつて容易に変化する自分というイメージが、個人的に、主体的に生きる自分という固定観念と矛盾を来すために、私たちは、この事実を軽んじ、否定しようとする。

「もちろん、色んな顔は持っている。けど、それはそれ。表面的なことであつて、〈本当の自分〉は、ちゃんとある。」

そして、その肝心の〈本当の自分〉が何なのか分からないことに思い悩み、苦しんでいる。実のところ、私自身がずっとそうだった。

流されやすい、主体性に欠ける、自分を持つてない、ブレる、……と、私たちの社会は、一貫した個性を持たない人間に、とかく批判的である。叩いても蹴つても、頑として己を貫き通す人間。それが通念的な英雄像だ。そのクセ、本当にそんな人が身近にいれば、誰もが迷惑がるに決まっている。アイツは、コミュニケーション能力がないのか？と。

あるいは、一緒に楽しく喋っている相手が、「でも、これは単なる仮面に過ぎませんから。僕の素顔はこうじゃないんですよ。」などと言い出すなら、勝手にしろ、という

気分になる。

どうしてこんなことになっているのか？

問題は、「個人」という概念にある。

私たちは、「個人」の価値を疑うことなく信じてきた。ところが、語源にまで遡^{さかのぼ}ってみると、どうもこの「個人」には疑わしいところがある。

元々、「個人」とは、英語の individual の翻訳で、明治になって日本に輸入され、翻訳された洋物の概念である。

individual とは、「分ける」という意味の動詞 divide に由来する dividual に否定の接頭辞 di がくつついた単語で、語源のラテン語では「分けられない」という意味だった。それがどうして、一人の人間を指す「個人」という意味に変化したのか？

詳細は、新書『私とは何か——「個人」から「分人」へ』で書いたが、一つにそれは、キリスト教という一神教の伝統だった。

神が一者であるからこそ、それと向かい合う人間も、唯一の〈本当の自分〉でなければならなかった。とある神にはこういう自分で接してるけど、他の神には別の自分、ということはありません。人間はそんなふうには分けられない。それが、「個人」だと。

もう一つは論理学^⑧である。社会の中に大勢の人間がいる。それをどんどん細かくカテゴリーに分けていって、最後の最後に残った一人の人間は、それ以上、分けることは出来ない。社会の中のそれ以上、分けられない最小単位こそが「個人」となる。

しかし、このいずれの発想も、極めて特殊にヨーロッパ的で、また近代的である。それは、信仰と論理から導かれた、いわば人工的な人間観である。

確かに、私たちの体は一個だ。脳ミソも一個で、それを分けることは出来ない。しかし、私たちが日常的に接しているのは多種多様な人間であり、一なる神ではない。たった一つの人格で、誰とでもコミュニケーションが成功するとするなら、それは、どんな消費者にもマッチする大量生産品のような当たり前障^まりのないものだろう。そんなのは屈である。

確かに、社会に対して個人というのは、政治や経済を考える上では有意義だった。そ

れは権力に対する抵抗拠点として実際に機能してきた。しかし、私たち一人一人が日常生活を生きるという意味では不都合である。

にも拘らず、私たちは、このやつかいな「個人」という概念に自分を適合させようとして、あれやこれやと思ひ悩んできた。

もう、そろそろ良いんじゃないか。もつと現実に戻した、新しい概念を基準に、自分のこと、他人との関係を考え直すべき時ではないか。そこで、私が考えたのが、individualから否定の接頭辞inを取った「分人dividual」という概念である。「分ける」という意味だ。

一人の人間には、色々な顔がある。つまり、複数の分人を抱えている。そのすべてが〈本当の自分〉であり、人間の個性とは、その複数の分人の構成比率のことである。

誰もが漠然と気づいていたことだが、考えるための適当な言葉がなかった。

私は、近未来小説『ドーン』の中で、初めてこの「分人」という概念を用い、続く『たちだけの愛』、『空白を満たしなさい』で深く掘り下げた。更に多くの人が、この概念を自由に使えるように、『私とは何か——「個人」から「分人」へ』は徹底して平易に分かりやすく書いた。

他者の多様性を認めるためには、まず自己の多様性を認めなければならない。それを肯定し得る思想を持つべきである。

【出典】平野啓一郎『「生命力」の行方—変わりゆく世界と分人主義』講談社二〇一四年（一部必要な箇所には、ルビ・注釈を追記した。）

※論理学 正しい判断・認識を得るために、思考の法則・形式を明らかにする学問。

（『明鏡国語辞典（第二版）』に基づく）